大の川の太陽　下

黒岩重吾

黒岩重吾

天の川の太陽

下

講社

天の川の太陽　下

九八〇円

©一九七九

昭和五十四年十月二十日初版発行
昭和五十四年十一月二十日再版発行

著者　黒岩重吾

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
電話　五六一-五九二一
振替　東京二-三四
検印廃止

天の川の太陽 下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

二十二

紀臣大人が深夜密かに大海人の屋形を訪れたのは、六七〇年の末であった。昼、使者があり、紀臣大人の来訪を伝えていたので、大海人は、眠らずに待っていた。

そして大海人は、紀臣大人から、驚くべき情報を得たのだ。

兄は年が明けると、大友皇子を正式に皇太子にする、というのだった。

そして蘇我赤兄が左大臣、右大臣は中臣連金、蘇我果安、巨勢臣人、紀臣大人は御史大夫（後の大納言）に任ぜられる、という。

そして大友皇子を取り巻く旧百済国人にも、相当な高位が与えられる筈だ、と紀臣大人は血相を変えて告げた。

大海人は血が逆流する程の憤怒を覚えた。

大友皇子を皇太子につける件について、兄は大海人に対して一言の相談もしなかった。

鎌足亡き後、兄は完全な独裁者になり、政治の総ては、自分が決定するようになっていた。相変らず、何かことがあると、赤兄、中臣連金などの五重臣を呼び会議を開くが、それは形式的で、最後は兄の決断によって決ってしまう。最近、大海人は、そういう会議の席にも呼ばれなくなっていたので、宮廷の様子は余り分らなかったが、薄々、大友皇子が皇太子になるのではないか、という予測は立てていた。

そして当然、兄は自分に相談するだろう、と考えていた。その場合、大海人は大友皇子を補佐し、倭国の為に働きたい、と兄に答える積りだった。

ところが兄は、皇太弟である大海人を完全に無視し、取巻きの重臣達にだけ、先に知らせたのである。

それは大海人の動揺が、群臣達に影響することを恐れたからだろう。

だが五重臣が前もって知っておれば、宮廷の動揺も押えることが出来る、と兄は判断したに違いない、如何に

も、兄らしいやり方だった。
穢い、許せない、と大海人は激怒したのだ。
「良く知らせてくれた、紀臣大人、礼をいうぞ、そなたが御史大夫に選ばれたのは良かった、どうか、天皇を補佐し、政治に励んでくれ、吾のことは心配するな……」
大海人は憤りを押えながらいったが、流石に声は慄えていた。
紀臣大人は鹿の毛皮に両腕を突いたまま、唇を嚙み締めている。大海人の無念の心情を思うと、豪毅な紀臣大人も声が出ないようだった。大海人は深く息を吸い込み、懸命に憤怒を押えた。
「それで、会議の模様はどうであった？」
大海人は瞑目しながら訊いた。
「会議は御座居ませぬ、早朝、赤兄殿を始め、吾々が呼ばれ、天皇の御決定を告げられました……」
「分った、紀臣大人、吾のいうことを良く聴け、天皇の御決定に絶対反対してはならぬぞ、そして、そなたは御史大夫に選ばれた感激を天皇に伝えるのじゃ、吾と意を通じていることなど、天皇に知られてはならぬぞ、吾のことは心配しなくても良い、さあ、余り吾の屋形に長く居るな、ただ、何かことがあれば、吾に知らせて欲しい、それだけじゃ、そなたに頼むことは」
大海人は寝所の方で讃良がすすり泣いている声を耳にした。押えていた憤怒が爆発しそうになった。大海人は声を荒げた。
「紀臣大人、そなたが疑われては、吾も、天皇から、あらぬ疑いを掛けられる、さあ、早く戻れ」
紀臣大人は身体を慄わせながら平伏した。
紀臣大人が立ち去るのを待ち兼ねたように、讃良が泣き濡れた顔で現われた。
「父が憎い、讃良は父が憎う御座居ます」
讃良は大海人に取り縋ると、大海人の膝に顔を埋めて泣いた。大海人は讃良の黒髪を撫でながら、瞑目していた。
「讃良、泣け、涙が涸れる程泣け、だが泣き終ったら、吾のいうことを聴け、吾は負けぬ、大友皇子ごときに負けてたまるか、讃良、吾は負けぬぞ」
讃良は涙で汚れた顔を挙げた。
「あなた、讃良は、あなたが行かれるところなら、何処にでもついて参ります、美濃の国にでも……」
讃良の涙が溢れた眼に、灯油の明りが微かに煌いていた。そうか、讃良は、すでに吾の心底を知っていたのか、

と大海人は深い吐息を洩らした。
「讃良、美濃のことなど、絶対口にしてはならぬ、今はひたすら耐え忍ぶ時じゃ、大友皇子が威張ろうと、群臣達が吾に背を向けようと、そんなことは構わぬ、ただ耐え忍んでおれば良い、そのうちに時が来る、分ったな讃良、宮廷内にも吾の味方は居る、心配するな、吾は大友皇子にだけは負けぬぞ」
大海人はそういうと、讃良を力一杯抱き締めた。
翌日、大海人が何喰わぬ顔で宮廷に行くと、兄が大海人を自分の部屋に呼んだ。
兄は奇妙に穏やかな顔で大海人に、大友皇子を皇太子にしたいと思うが、どう思うか、と質問した。もし大海人が紀臣大人から聞いていなかったなら、顔色を変えていたであろう。大海人は昨夜から何度も鏡に向って練習した、気弱い微笑を浮べた。
「天皇、吾もそれが一番だと思っておりました、どうもこの頃、年齢のせいか身体の調子が悪く、絶えず風邪を引いております、吾は皇太弟と呼ばれておりますが、このような状態では、到底、政治を掌ることなど出来ません、その点、大友皇子は学識もあり、まだ若く、その立派な器は、宮廷の群臣達が認めています、吾は年が明けたなら、屋形に籠り、暫く休養致したい、と思っておりました、その時、大友皇子を皇太子になさるよう、天皇にお願いしたい、と思っていたところです、そして身体が治れば、天皇と皇太子の片腕になり、倭国の為に力を尽したい、と念願しております、まだ、年は明けておりませぬが、天皇と皇太子の為、心からお祝いを申し上げます」
兄は生真面目な顔になると、大海人の手を取った。
「大海人、そちが祝ってくれたことを嬉しく思うぞ、それにしても、身体が悪いというのは良くない、政治のことなど気にせず、充分休養したら良いな、讃良や、大江皇女、新田部皇女の為にも、長生きして貰わねばならぬ、朕も娘達の泣き顔を見るのは辛い」
兄は手を放すと、満足の微笑を顔に浮べた。
「はあ、余り宮廷に参上出来なくなりますが、どうかお許し下さい」
「そんなことは気にするな、朕も、そちの屋形の者達が、そちが天皇になる積りはない、と口にしているのを耳にしていたのじゃ、これで決った、年が明ければ、大友皇子を、皇太子の位につける」
「心の重荷が取れました」

と大海人は頭を下げたのだ。

六七一年正月、大友皇子は正式に、皇太子の位につき、五重臣達も、左、右大臣、御史大夫に任ぜられた。

書紀では、大友皇子が太政大臣に任ぜられたように記載されているが、実際は皇太子になったものと思われる。太政大臣と記したのは、大海人を謀反人にしないための、書紀の潤色であろう。

大友皇子が皇太子になると共に、旧百済国人にも、群臣達が吃驚したような冠位が与えられた。佐平余自信、沙宅紹明は大錦下の位を授けられ、法官大輔（法務次官か？）に任ぜられ、鬼室集斯は小錦下で、学職頭（文部大臣、大錦は令制の四位、小錦は五位に当る）に任ぜられた。

また谷那晋首、木素貴子、憶礼福留、答炑春初は、大山下で軍事の将軍に、炑日比子、贊波羅金羅金須、鬼室集信も同じく大山下で薬学の高官となった。小山上は、徳頂上、吉大尚、許率母、角福牟の四人だが、小山下になると旧百済国の達率達五十余人に授けられたのである。この中で大錦下沙宅紹明、小山上許率母は大海人とも親交があった。

この授位は、兄が大友皇子を溺愛し過ぎた結果の授位だけではなかった。

何故なら、主戦派も非戦派も一様に高位と重要な職を与えられたからであった。

つまり、兄は兄なりに韓土の状勢を睨みながら、この激動の時代の中で、近江朝の強化と倭国の律令体制の完成を再び夢見たのだった。その為には、亡命旧百済国人の学識、頭脳が、どうしても必要だったのである。

だが、兄の心底に大友皇子の将来の安泰を願う気持があるのを、大海人は見逃さなかった。

何故なら、将来、大友皇子が天皇になった場合、倭国の律令体制が整っていたなら、天皇の地位は安泰だからである。

遊覧と酒宴に日々を過していた兄は、鎌足が死亡し、完全な独裁者となるや、酔いから醒めた。ひょっとすると兄は、本能的に自分の死を予感したのかもしれない。

独裁者は凄絶な形相で再び政治に立ち向った。先ず第一の障害は、皇太弟、と呼ばれている大海人である。

宮廷の群臣達の中には、次期天皇を誰にするかという重大事について、まだ兄の真意を計り兼ね、大海人と大友皇子に、右顧左眄する者がかなり居た。

今のうちに自分の気持をはっきりさせておかなければ、近江朝に亀裂が生じる、と兄は酔いから醒めた眼で、大

海人を眺めたのだ。

そして兄は、今更の如く、大海人が大友天皇の行手を阻む巨大な岩であることに愕然としたのだ。障害は早いうちに取り除いておかねばならない。

兄は自分の意のままになった腕を挙げ、凄じい形相で、大海人を切ったのである。

だが独裁者は、所詮、近視眼的にしか、物が見えない。紀臣大人を除く四重臣は兎も角、宮廷の群臣達の中には、大友皇子の皇太子決定と、旧百済国人に対する総花的な授位に反感を抱く者がかなり現われた。

ことに地方豪族の場合は、反感、反撥が酷かった。戦に負けた旧百済国人が、高位を得、要職についたのだ。自国の民を使役で酷使されている上に、何故、旧百済国人が重きをなす朝廷に仕えねばならないか、という憤りが彼等の胸中に沸いた、としても不思議はないだろう。

兄は近江朝を強化した。

強化したことによって、遠くに居る地方豪族達の憤りが、山、川、沼から立ち昇る瘴気のように、近江朝を侵蝕し始めたのを、兄は気付かなかった。

大海人は、表面的には、ただ耐え忍ぶことによって、瘴気が近江朝を蝕むのを観察していた。だが、大海人の見えない手は、美濃に伸びていたのだ。大海人は、男依、君手、広の三人を絶えず美濃に走らせ、唐の鉄鋌による刀、槍の生産を開始した。

と同時に、三人の舎人達の出身地の豪族に対し、鍛冶人を出来るだけ大勢集めるように命じた。

舎人達は、大友皇子が皇太子になったことで、落胆はしなかった。何故なら彼等は、大海人のこれまでの行動から、大海人が、このまま引下らないのを感じ取っていたからである。口にこそしないが、舎人達の眼はこれまでよりも更に強く光り、胸の血潮は一層沸いていたのだ。

大海人は、多臣品治に対し、鍛冶人達を集め始めた美濃の豪族達に援助するよう、命令を下した。だが、大海人の湯沐邑である安八磨郡の内部に於ては、刀、槍の製作を禁止した。大海人の直轄地であるだけに、兄の疑惑の眼が光り易いからだ。唐の鉄鋌で、刀、槍を製作したり、鍛冶人を集めていることが兄に分ったなら、大海人の生命は危い。ことに、慎重の上にも、慎重を期さなければならない。

だから刀、槍の製作は、安八磨郡から離れた各務郡や、池田郡の奥地、また山深い山間の地で密かに行われていたのである。

大伴連馬来田、吹負の兄弟が、御行、安麻呂と共に近江朝を去り、大和に戻りたい、と大海人に相談に来たのは、三月になってからであった。名門大伴一族のこの兄弟も、大海人の逼塞と共に、近江朝では冷遇され、すでに朝廷に仕える意志を失っていた。

大海人は二人に、時が来るまで辛抱するように説得した。

「今が一番大事な時じゃ、軽挙妄動は災の元じゃ、天皇の眼は猜疑心と共に吾に向いておる、今、天皇が一番恐れているのは何だと思う？　吾の謀反じゃ、そち達が大和に戻れば、天皇は吾に謀反の疑いがあると、吾やそち達を直ちに捕えるじゃろう、古人大兄皇子、蘇我石川麻呂、有間皇子の無残な死に様を忘れてはならぬぞ、その時が来れば吾はそち達に、大和に戻るように告げる、それまでどうか忍耐して欲しい、吾がこの屋形でじっとしている限り、天皇は先ず、吾を捕えたりはしない、幸い、現在、吾は天皇の三人の娘を妃にしておる、天皇にも矢張り親娘の情は残っている、そち達は、これから先、吾の屋形に出入りしてはならぬ、ただ、天皇始め、宮廷内部の様子を探り、少しでも変ったことがあれば、吾に伝えて欲しい、それも吾の屋形に来ては駄目じゃ、深夜、矢文で知らせるのじゃぞ、この屋形から千尺程登ったところに大きな岩がある、そち達から矢文が届けば、吾は何時でもそこに行く、それから、これはそち達だけに告げておくが、紀臣大人は吾に好意を寄せておる、紀臣大人には、それとなく近付いておくようにしろ、分ったな、心配は要らぬ、十市妃も吾の味方じゃ」

大伴兄弟は、紀臣大人や、十市妃の名を聞くと、愁眉を開いたようだった。彼等は、屋形に閉じ籠り、宮廷に余り出て来ない大海人の胸中に潜む見えない力を感じ取ったようであった。

大海人は宮廷に出ても、もう政治に参与出来る立場ではなかった。

それでも大海人は屈辱を噛み締めながら、時々、兄の機嫌伺いに顔を出した。

そうしなければ、兄の猜疑心は強くなる。

その日も大海人は宮廷に行った。

兄は新しく作った水時計を台に取り付けていた。六六〇年、皇太子だった兄は、初めて水時計を作ったが、今度のは前よりも豪華で、正確だった。金銅の壺に水を湛え、水が小孔から洩れるにつれて、時を知らせる目盛が水上に現われる仕掛けだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大友皇子、赤兄、中臣連金が兄と一緒に、水時計が台に取り付けられるのを見守っていた。大海人と大友皇子の視線が合った。

皇太子である大友皇子が軽く会釈したのは、学識者としての礼儀を守った為だろうか。

それとも勝者の余裕か。

大海人は屈辱を押えながら丁重に挨拶を返した。

「大海人か、見ろ、素晴らしい水時計じゃろう、群臣達の気持を引締める為に、この水時計で時を知り、鐘鼓を打って時を知らせる積りじゃ」

水時計の台は宮廷の庭に置かれ、雨が掛らないように瓦葺きの屋根で覆われていた。

時を知らせる役人が二人、水時計を台の中央に置いた。初夏の陽に磨かれた金銅製の壺が眩しく輝く。兄は眼を細めて眺めていた。

「なかなか結構なもので御座居ますなあ」

「ああ、朕の苦心の作じゃ、それはそうと大海人、身体の方はどうじゃ、随分陽焼けしておるではないか？」

「この冬以来、風邪を引いたり、身体の節々が痛く、どうも調子が良くありません、それで、春になってから、湖上を遊覧し、魚を釣ったり、狩に出掛けたりして、出来るだけ陽に当るようにしております」

政治の場に参加出来ないからといって、理由もなく宮廷に出ないのはおかしいので、大海人は兄に、身体の具合が悪い、と常々いっていたのだ。

兄も、やり切れなく鬱々としている大海人の気持は分っている筈だった。だが兄は、そんな大海人の気持に眼を背け、身体の具合が悪いのなら、政治のことなど気にせず、充分休養すれば良い、と寛容な態度を示していた。大友皇子が皇太子になり、政治の中枢の場に立った以上、大海人が宮廷に屢々顔を出されると、兄としては眼障りだった。

兄に取って、今の大海人は全くの邪魔者なのだ。

「陽に当るのも良いが、余り無理をしてはならぬぞ、讃良も心配しているじゃろう、讃良は元気か？」

「有難う御座居ます、草壁皇子と、毎日遊び戯れて居ります」

「讃良が元気なのは何よりじゃ、まあ、政治のことは余り気にせず、当分のんびりしておれ、また身体が良くなったら、皇太子の力になってやってくれ、皇太子は学識はあるが、まだ若い、何かと経験が足らぬ」

兄は生真面目な顔でいった。

嘘をついたり、心に計り事がある時、兄は生真面目な顔になる。不思議に、この表情だけは変らなかった。
「はあ、その時が来れば、是非共、お力になりたい、と思って居ります」
大海人は、赤兄と中臣連金が、一瞬、顔を見合せたのを感じた。何を白々しいことをいっておる、と二人は内心嘲笑したに違いなかった。
「さあ、明日は漏刻の完成を祝う宴を開こう、鐘鼓を合図に宮廷に参上せよ、左大臣と右大臣から、その旨、小山上以上の群臣達に伝えるように、では戻ろうか……」
兄は大友皇子、赤兄、中臣連金に視線を走らせたが、大海人を無視した。
吾は酒宴の席にも呼ばれなくなったのか、と大海人は顔を伏せた。
紀臣大人から使者が来て、一族の紀臣阿閉麻呂が近江に来、皇太弟にお会いしたい、と伝えて来たのは四月の中旬だった。
大海人は紀臣阿閉麻呂の願いを拒否した。
そして、何時か自分の方から呼ぶ時があるかもしれないから、それまで待つように、と舎人の一人を遣わして、直に大海人の言葉を伝えさせた。

紀臣阿閉麻呂は伊賀阿拝郡の郡司だった。と同時に国宰頭的存在でもあった。名門氏族のせいである。
兎に角、今は近江の屋形で訪問者と会わず、讃良や大江皇女、新田部皇女などを連れ、蒲生野や、湖上を遊覧しておれば、身の安全だけは得られそうである。
讃良は相変らず父を呪い憎んでいるが、大海人は、讃良に、そなたを妃にしたおかげで、吾は殺されずに居られるのじゃ、そう怒るな、と冗談まじりにたしなめた。
兄に対する讃良の憎悪が、兄の耳にでも入れば大変である。
「讃良、何度もいうようだが、吾には吾の考えがある、今、そなたがすることは、吾と共に船遊びをしたり、蒲生野を遊覧することじゃ、そして、吾に負けず舎人達の世話をしてやって欲しい、それが将来、吾の大きな力になる、天皇の悪口は余り口に出すな、憤りは胸の中に秘めるのじゃ」
「讃良は、あなたと御一緒なら、何処にでも参ります」
「嬉しく思うぞ、だが吾はまだ、何処にも行く気持はない、政治を離れて、爽やかな湖上で、船遊びをするのも、また楽しいではないか、なあ讃良、この機会に思い切り、遊んでおこう」

大海人は、何とかして讃良の気持をほぐす必要があった。讃良は、これまでにない新しい女人で、強い意志を持っている。

草壁皇子も、乳母にまかせず、自分で育てたのだ。だが何といっても女人である。

もし大海人が胸底に整いつつある恐るべき計画を洩らしたなら、どんな時に、それを舎人達の前で口にするかも分らない。

大海人の舎人達は現在三十余人も居た。その中で、大海人が真に信頼出来るのは十人ばかりである。

もし大海人の舎人達の一人でも、大海人を裏切り、讃良が怒りにまかせて口にした言葉を、外部に洩らしたなら、折角の計画も水の泡になる。

讃良が敵だ、と知ったなら、兄は自分の娘でも許さないだろう。

だから大海人は、自分の計画を讃良には洩らせないのだ。

その頃童謡が流行った。

橘は　己が枝枝　生れども
玉に貫く時　同じ緒に貫く

この歌の意は矢張り、それぞれ異なった枝に育った旧百済国人を、一斉に高位高官につけた近江朝に対する諷刺で、嬬て国内が乱れることを暗示したものであろう。

書紀に記載されている童謡は、時の政治を批判し、国内の乱れを暗示したものが多い。

五月の始め頃から、兄の顔色が悪くなり痩せ始めた。そして兄は時々腹痛を訴えた。六月中旬、流れ星のあった夜、大海人は杖を回転させて兄の生命を占った。中国から伝わった陰陽の占である。その結果兄の生命が長くないのを大海人は知った。兄と同じような容態で死んだ者は多い。大海人は自分の真意を信頼している一部の舎人に告げる決心を固めた。

六月の末の或夜、大海人は美濃から戻った男依、君手、広、それに雄君、根麻呂、書直智徳の六人の舎人を連れて、裏山の巨岩に行った。月の無い夜で星だけが降るように煌いている。大海人は何時ものように岩上に胡座をかいた。大海人が最も信頼し、それぞれ特命を与えていた者達ばかりである。大王家の名門氏族の子弟である県

犬養連大伴、佐伯連大目を呼ばなかったのは両名に知らせるには時が早いと思ったからだ。

六人の舎人達は、大海人を取り巻くように蹲り、岩上の大海人を緊張の面持ちで眺めている。闇の中の大海人は巨岩から突き出た、岩の塊のようであった。

「六人共、良く聴け、吾はこれまで、そち達に、特別の命令を与えていた、男依、君手、広、吾がそち達の一族と親密にし、唐の鉄鋌で刀、槍を製作させているのは、どういう目的の為か、そち達に分るか？」

大海人の声は淡々としていたが、それだけに重大な決意が秘められているのを舎人達は感じた。三人の舎人達は、思わず息を呑み、大海人を見詰めたが、質問の重大さを知り、誰も直ぐには返事をしなかった。

「今夜は構わぬぞ、そち達が思っていることを遠慮なく吾に喋れ、男依、先ずそちからじゃ」

「はあ、将来の戦の場合に備えて、強い武器を作られているのだ、と思います」

「それだけか、男依」

大海人は灌木の傍で、黒い影のように蹲っている男依を見詰めた。

「皇太弟様、その戦の相手を申し上げても、よろしゅう御座居ますか？」

「何でもいえ、と申したじゃろう」

「はっ、では申し上げます、戦の相手は、皇太弟様に敵意を抱いている、この近江朝廷だ、と吾は思います」

男依の声は緊張と昂奮の為、掠れていた。多分、男依は大海人の一喝を覚悟していったに違いなかった。

「君手、そちはどうじゃ？」

「男依と同じで御座居ます」

「広は？」

「吾もそのように思っておりました」

大海人は、智徳と雄君に同じ質問をしたが、返答は同じであった。

大海人は大きく頷いた。

「そうか、まあそち達がどう思おうと自由じゃ、吾は普通なら、次の天皇になるべき地位に居た、だが、天皇の盲愛により、大友皇子が次の天皇になる、吾は子供のような大友皇子に仕える積りは毛頭ない」

「皇太弟様、吾々一同は、皇太弟様のそのお言葉を、何時聴けるか、と、そればかりお待ちしていました」

男依は感動で慄えながらいった。

他の舎人達も一斉に、その通りです、と答えた。周囲

には、時々怯えたように鳴く夜鳥の声以外、何も聞えない。

大海人の胸も感動で熱くなった。舎人達が、大海人の野望を薄々気付いているのは間違いない、と思っていたが、これ程まで、自分と一体となっていたとは、大海人は予想していなかったのだ。それは飛鳥時代大海人が、舎人達と、一緒に暮していたせいであろう。つまり舎人達は、大海人が放つ磁力のような人間的な魅力に惹かれていたのだ。それは、政治家としての大海人の器とは、また別なものである。

暗闇の中で舎人達の顔は見えないが、大海人は彼等が皆、涙を流しているのを感じた。

大海人が、新しい浜楼を祝う酒宴で、兄に剣舞を強要され、満座の中で兄に愚弄されたことは、群臣達の口から伝わり、舎人達は、悲憤の思いに駆られていた。そして、大友皇子が皇太子になり、大海人が逼塞して以来、舎人達も、兄と大友皇子を憎むようになっていたのだ。

「皆の気持を知り、吾は嬉しい、時を得たなら、吾は吾の力で天皇になる積りじゃが、口でいう程、簡単なことではない、何万尺の山を登らねばならない程、苦しい道じゃぞ、今の近江朝は、大友皇子の取巻き連中によって固められており、吾がどう足掻いても、天皇になることは出来ぬ、だから吾は機を見て、出家し、吉野の宮滝離宮に隠遁する、そち達も知っているように、かつて古人大兄皇子は、出家し宮滝離宮に隠遁したが、兄が差し向けた四十人ばかりの手兵によって殺された、兄はそのことを良く覚えておる、そして、今は古人大兄皇子の怨霊を恐れている、だからこそ、倭姫を皇后にしたのじゃ、吾が、宮滝に隠遁するといえば、兄は当然、古人大兄皇子のことを思うであろう、そして兄は、何時でも吾を殺害出来る、と安心する、吾の計画はこうじゃ、先ず吾は兄を安心させておいて、その間に、密かに、東国で軍団を編制する、吾が、今、美濃で作らせている唐の鉄鋌による刀、槍は、そち達、及び、隊長達に渡す、男依、軍団の編制は可能か、美濃の豪族達の気持はどうじゃ？」

「可能で御座居ます、美濃の吾等が一族、郡司を始め、ことごとく、皇太弟様の身を案じております、大友皇子が皇太子になったことを憤り、旧百済国人が、近江朝で要職を得、吾等一族に命令する立場に立ったことに反撥しております、吾の推定では、吾の本貫地、各務郡だけでも、即座に五百人の兵は集められます」

男依は大海人の意向を察し、美濃に行く度に、軍団編

制のことを考え、一族を通じ、それとなく徴兵出来る兵士の数を調べていたのであった。男依が大海人に仕えて以来、すでに十年以上になる。紅顔の美青年は、雄々しい武将に成長していたのだ。

「男依、立派じゃ、そこまで調べていたのか、君手、広、そち達はどうじゃ？」

君手、広の返答も同じであった。二人共、五百人ずつ、千人の兵は集められる、という。

「そち達の一族だけで、千五百人の兵を集められる、多臣品治は、千五百人、それだけで三千人じゃ、一挙に三千人の挙兵が可能ならば、美濃の奥地、更に信濃の挙兵も可能であろう、それに、吾が幼少時代、共に暮した尾張大隅も挙兵に参加するだろう、尾張大隅には、尾張の豪族達を味方にするよう工作させる、それが成功すれば、美濃、尾張、伊勢だけで二万人の挙兵が可能じゃ、それに吉備の国宰頭当麻公は吾の味方じゃ、近江朝が吾の挙兵に驚愕して、兵を集めたとしても、畿内が主じゃ、いや、大和には大伴馬来田、吹負の兄弟が居る、勝利は吾のものじゃ、だが千丈の石垣も、一つの石が壊れれば、崩れてしまう危険性がある、このことは、誰にも告げるな、そち達の胸にだけ秘めておけ、吾が宮滝に出家、隠遁する際にも、吾はこの計画を最後まで明かさぬかもしれぬ、それから、そち達は、それとなく舎人達に、吾が近々、出家、隠遁するかもしれぬ、と告げ、彼等の反応を探れ、吾は吾なりに、信頼出来る者を調べる積りじゃ、良いか、吾はこの計画を讃良にも告げていない、絶対口外してはならぬぞ、もし、女人と媾合い、洩らしたりしたなら、その場で、女人を殺し、自分も舌を噛み切って死ぬのじゃ、分ったな」

「分っております、この口が裂かれ、火で焙られようとも、口にしたりは致しませぬ、吾は、吾の一族、物部朴井連椎子が、宮滝で無念の涙を呑んだのを片時も、忘れてはおりませぬ」

雄君が嗚咽を噛み殺しながら答えた。

雄君の伯父、朴井連椎子は、古人大兄皇子の謀反に加わった、という罪で、流罪になり、流罪先で亡くなったのだ。

朴井連椎子は、赤兄の命令で有間皇子をその屋形で囲んだ朴井連鮪とは別人である。

矢張り雄君の一族だが、鮪は今も赤兄に仕えていた。

雄君はそういう鮪を、節操のない男だ、と軽蔑していたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com